

京隈侍屋敷遺跡

— 第27次発掘調査報告 —

平成26(2014)年3月
久留米市教育委員会

序

久留米市は、筑紫平野の中心に位置し、古くから水路と陸路の要衝としての位置を占めてきました。このため市内には、先人達の残した多くの文化遺産が存在します。

今回の調査は、京町について実施しましたが、当地区でこれまであまり明らかにされていなかった中世の遺構を調査しています。これによって中世久留米の歴史や文化を解明するための資料が得られました。この成果を活かして、今後の久留米市の市民文化や教育の発展に貢献できることを願っております。

また、発掘調査に際して多大なご協力をいただきました土地所有者の[]様をはじめ、周辺住民の皆様にご心より御礼申し上げます。

平成 26 年 3 月 31 日

久留米市教育委員会

教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、共同住宅建設に先立ち、平成 25 年度に[]氏の委託を受けて実施した、京隈侍屋敷遺跡第 27 次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の江頭俊介が担当した。本書に掲載した遺構実測図の作成は、江頭と大淵文子、塚本明美が行い、浄書は江頭が行った。
3. 遺構写真は、マミヤ RB67 を用いて江頭が撮影した。遺物写真撮影はニコンデジタルカメラ D500 を用いて、久留米市埋蔵文化財センターにおいて、江頭が行った。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
4. 遺構実測図は国土調査法第 II 座標系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位は全て座標北を示す。
5. 本書に使用した遺構の略記号は、SDー溝、SEー井戸、SKー土坑を示す。
6. 出土遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
7. 本調査の略記号は LKG-27、調査番号は 201310 である。
8. 本書の執筆・編集は江頭が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	5
IV. 総括	8

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、宅地造成に伴う事前の発掘調査である。平成25年2月28日、土地所有者の[]氏から、久留米市京町232-1、232-2、232-3における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地帯は、周知の遺跡である京限侍屋敷遺跡内にあたり、今回の調査地においても、武家屋敷に伴う遺構が残存している可能性があると考えられたため、同年3月15日発掘調査が必要である旨回答した。同年5月2日、地権者である[]氏より、発掘調査の依頼が提出され、それを受けて同年5月27日[]氏と久留米市長檜原利則は、京限侍屋敷遺跡第27次調査の委託契約を締結した。同年6月12日より、発掘調査を開始し、同年7月10日に発掘調査を終了した。平成26年3月31日まで整理作業と報告書の作成を行った。

2. 調査の体制

調査主体：久留米市教育委員会	教 育 長：堤 正則
調査総括：市民文化部	部 長：野田 秀樹
	次 長：佐藤 光義
文化財保護課	課 長：園井 正隆
	課長補佐兼課主査：宮崎 俊一 白木 守
	事務主査：塚本 映子
	庶務担当：豊福 早苗
	調査担当：江頭 俊介
	整理担当：古賀 和子 丸山 裕見子

発掘調査臨時職員

秋永絹子、秋吉力、牛嶋一男、大淵文子、蒲池稔、川原初美、合戸喬一、古賀香澄、古賀勝治、榎藤均、佐藤朱美、高尾幹幸、田中とし子、塚本明美、中野ゆみ、原口貞子、溝口輝男

3. 調査の目的と経過

調査地は京限侍屋敷の東から四番目の筋の南端に所在する。武家屋敷地の状況を確認することを目的とした調査である。平成25年6月12日、重機による表土剥ぎを行った。地表上面を5cmほどわずかに掻き取ったところ、遺構面が検出された。かなりの削平を受けているようである。各遺構の調査・記録を行い、平成25年7月9日に調査区の写真撮影を行った。同年7月10日に発掘調査を完了し、埋戻しを行った。第26次調査と併行して実施された調査であったことや、梅雨時期でもあったことから、思うように捗らなかった。調査後は、平成26年3月31日まで、遺物整理と報告書作成を行った。遺構実測はトータル・ステーションで行い、「遺構くんCubic」で編集した。記録写真は、カラーリバーサル・モノクロ6×7判で撮影した。

Ⅱ. 位置と環境

久留米市は、九州の北部、筑後川の中流域にあたり、筑紫平野の中心に位置する。古代においては筑後国府や国分寺が置かれ、筑後地区の政治・経済・文化・宗教の中心を占めた。近世においては小早川氏、田中氏の代を経て、有馬氏二十一万石の城下町として栄えた。

本調査区が位置する久留米市北西部は、九重連山から端を発し、両筑平野を西流した筑後川が有明海に向かって南西へ方向を変える地点に位置する。本調査区一帯の京隈地区は、久留米城の本丸が標高 24m と最も高く、南側に向かってなだらかに傾斜している。調査区付近の標高 10m 程度であり、約 200m 南側には池町川が流れている。

中世以前の人間活動の痕跡については、弥生時代の甕棺や古代の溝などが時折検出される程度で、全体的な歴史像の解明に至っていない。近世になると小早川秀包、田中吉政と領主が変わり、元和 7 年（1621）に有馬豊氏が久留米城に入城すると、城郭や町の拡大が行われ、元和 9 年には京隈小路が建設され、1670 年代には完成したようである。

京隈侍屋敷は、近世当時は京隈小路と呼ばれた。久留米城の西側一帯に広がる低台地で、西側には洗切、梅林寺、訓練場などを挟んで筑後川がある。東の入口である京隈口（現明善高校前）から入って西端の梅林寺まで続く東西道路と、それに直交する 5 本の南北道路を主要道としており、南北道路は東から順に一番目筋から五番目筋まで名が付いている。五番目筋の南西にもう一本南北道路があり（現京町小学校の通り）、小松原小路と呼ばれている。小松原から南には瀬下口という出入り口があり、南西の瀬下町に続いている。近年の九州新幹線開業の影響で開発が進行しており、これまでに 26 回にわたる発掘調査を重ねている。それによって地割の復元や、各屋敷住人の性質や動向などが徐々に明らかになり、近世久留米城下の様相が復元されつつある。

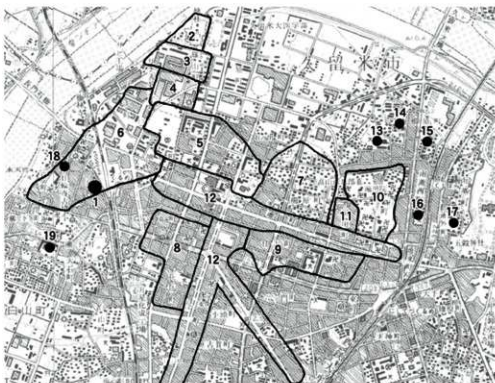
1997 年の第 2 次調査は坂本繁二郎生家の西隣の西尾家屋敷地について実施され、中世の土壌墓や、近世のピット、土坑などが検出されている。第 3 次調査は、京隈小路の東端中央の京隈口に隣接する竹井家、本戸家、番所の跡を調査した。侍屋敷地の東側境界にあたる場所で石組みの溝が検出されたが、町屋側と侍屋敷側で石組みの構造が異なることから、それらの境界溝である可能性が高い。第 4 次は後の三潁県大参事水野正名の祖父水野又藏邸を調査した。第 5 次調査は明善高校の南隣で実施された。調査区北側は久徳家、南側は本庄家にあたる。19 世紀の穴蔵から 17 世紀前半の絵唐津の皿が出土しており、久徳家の伝世品の可能性が考えられている。第 6 次調査は二番目筋南側の北から 2 軒目、水野家、結城家跡を調査している。弥生時代中期前半の甕棺 4 基をはじめ、近世の遺構、遺物が確認されている。屋敷の当主水野傳藏は御側大横目であり、後の三潁県大参事水野正名の本家筋にあたる。また、調査区は久留米市立病院の跡地でもあり、当時の排水遺構が検出されている。第 7 次調査は JR 久留米駅新幹線ホーム建設に伴って南北 180m に及ぶ細長い調査区が設定されたため、屋敷境や道路側溝が検出され、地割の復元に大きな前進があった。調査区にかかる屋敷の住人は、戸田家、吉井家、水野家、北川家、原家、大庭家、村上家、本庄家、下村家、石野家の十家に及ぶ。第 8 次は第 3 次の南隣の敷地について実施された。ガラス瓶や便器など明治期の

遺物について詳細な検討がなされ、近代久留米の社会像に迫る調査のさきがけとなった。第9次は四番目筋の辻にある星野家にあたる。近世の屋敷境の溝が検出されている。第10次は、二番目筋南側の林家、今井家、石黒家について調査された。寛永期から近代まで続いた道路遺構が検出されており、近代の石敷きの道路は趣のあるものである。第11次は第7次の西に隣接しており、大庭家にあたる。第12次は、石田家、堀家、のちに中野家、中家の屋敷地にあたる。近代洋画家の坂本繁二郎生家とは1区画隔てた東側にあたる位置である。屋敷を囲む区画溝や、塀、下駄、桶、独楽など大量の木器が確認されている。まとまった量の木器の出土は京限では初であり、近世久留米藩士の生活の様子をよく示す資料である。第13・17・19次は坂本繁二郎生家の保存修復事業に伴って実施された。繁二郎生家の礎石や土坑、雨落ち、袍衣遺構などが詳細に調査された。遺物も坂本家の遺品として活用が供することができる良好な資料が多く得られた。第14次では城家と堀尾家の屋敷境の溝が検出されている。第15次は太田家にあたる。第16次は第14次と同じ城家と堀尾家の敷地内である。17世紀前半まで遡る屋敷境の溝が検出されている。城家は肥後山鹿を本貫地とする家で、乗馬の名手であったため、三代藩主親利のころ召し抱えられたという。第20次も城家、星野家を、第22次は松下家、太田家を調査している。

今回の調査区は延宝久留米城下図では村上源左衛門、天保図では村上家、安政図では水島悦太郎家の屋敷地である。京限侍屋敷四番目筋の最南端の突き当り南側であり、その東側と南側は田に面している。今回の調査区は、村上家の東端の中ほどを調査したことになる。

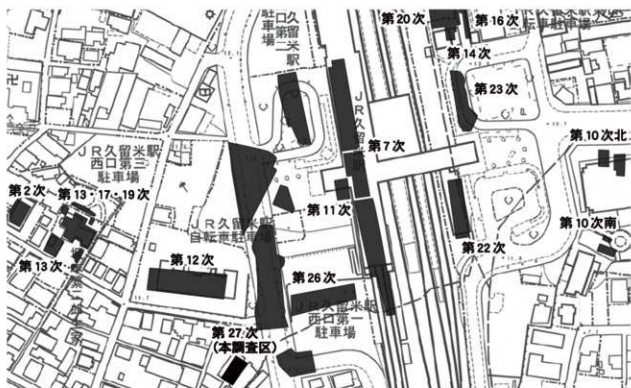
1. 京限侍屋敷遺跡 (本調査区)

2. 久留米城本丸跡
3. 久留米城二ノ丸跡
4. 久留米城三ノ丸跡
5. 久留米城外郭遺跡
6. 京限侍屋敷遺跡
7. 柳原侍屋敷遺跡
8. 庄島侍屋敷遺跡
9. 十間屋敷遺跡
10. 寺町
11. 鉄砲小路
12. 久留米城下町遺跡
13. 東柳原今寺遺跡
14. 石丸遺跡
15. 辻遺跡
16. 南薫西遺跡
17. 南薫本村遺跡
18. 日輪寺古墳
19. 速水遺跡



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

II. 位置と環境



第2圖 京隈侍屋敷遺跡第27次調査区位置図 (1/2,500)



第3圖 京限侍屋敷遺跡各次調査地点位置図 (安政2年舊廓図)

Ⅲ. 調査の記録

1. 検出遺構

今回の調査では中世の溝1条、近世の井戸2基、土坑1基、その他ビット少数を検出した。以下主要な遺構について述べる。なおSE7、SE8、SK6は測量データを失ったためその部分は模式的に表記している。

溝

SD1 (第4・7・8図)

調査区北東側で検出した長さ16m、幅1.3m、深さ0.8mの溝である。断面形状は逆台形を呈し、埋土は暗褐色粘質土である。軸はN-15°-Wである。屋敷の東境に接する位置にあるが、軸が合わず、近世の屋敷境ではない。16世紀代の土器などを含む。

井戸

SE7 (第4・10図)

調査区中央で検出した直径1m程度の素掘りの井戸である。深さ1mほど掘り下げた。遺物の出土は無い。

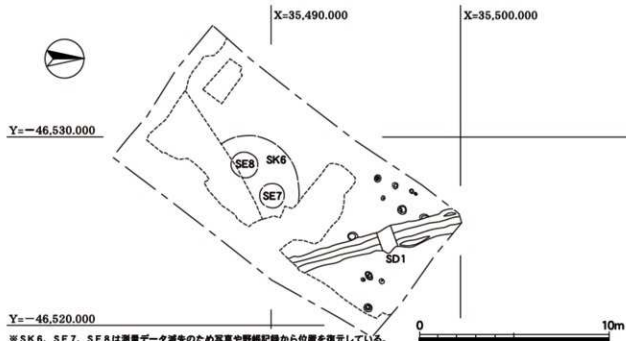
SE8 (第4・11図)

調査区中央で検出した直径1m程度の素掘りの井戸である。深さ1mほど掘り下げた。遺物は18世紀後半を下限とする。内曇りと呼ばれる精製の土師器皿が1点出土している。

土坑

SK6 (第4・9図)

調査区中央で検出した直径5m程度、深さ20cm程度の土坑である。17世紀後半の陶磁器が出土している。

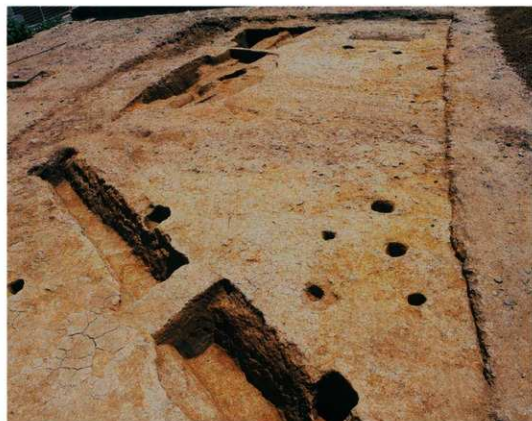


第4図 京限侍屋敷遺跡第27次調査遺構配置図 (1/200)

Ⅲ. 調査の記録



第5図 調査区全景（南西から）



第6図 調査区全景（北東から）



第7図 SD1完掘状況（南から）



第8図 SD1土層断面（北から）



第9図 SK6完掘状況（東から）



第10図 SE7掘削状況（北西から）



第11図 SE8掘削状況（北西から）



第12図 調査風景（北から）

出土遺物

今回の調査では出土遺物は比較的少なかった。17世紀後半から19世紀前半にかけての陶磁器などパンコンテナー1箱分の遺物が出土した。詳細は観察表を参照いただきたい。

第1表 出土遺物観察表

遺物名 図版番号	出土遺構	材質	器種	法量			色調(染付・釉薬)		調査(文様)			胎土(製作地)	備考・時代	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面	底面・高台 内印底等			
1 第11図	SD1	瓦質土器	鉢	8.8	10.0	1.5	浅黄褐色	浅黄褐色	スタンプ ナデ	ハケメ	-	粗い、白色粒含む。	15c~16c	201310 000004
2 第11図	SD1	土師器	鍋	8.5	5.0	1.5	褐色	褐色	ナデ	回転ナデ	-	粗い、白色粒含む。	15c~16c	201310 000001
3 第11図	SD1	土師器	鍋	7.5	4.9	1.2	褐色	褐色	回転ナデ	回転ナデ	-	粗い、白色粒含む。	15c~16c	201310 000002
4 第11図	SD1	土師器	羽釜	9.0	4.5	3.7	褐色	褐色	回転ナデ	回転ナデ	-	粗い、角閃石含む。 外面黒付着。	15c~16c	201310 000003
5 第11図	SE8	土師器	皿	[11.0]	5.6	1.5	灰白	灰白	回転ナデ	回転ナデ	-	精良	内曇り 近世	201310 000006
6 第11図	SK6	磁器	皿	-	[5.0]	(1.2)	染付	-	山水	-	-	継書	18c前半	201310 000005

IV. 総括

今回の調査では、中世後期の溝1条、近世の井戸2基、土坑1基が検出された。調査区が狭小であり、近世の屋敷地の土地利用については不明な点が多く残る。延宝八年図(1680)での住人は村上源左衛門であり、天保図においても村上家である。弘化から嘉永ごろと見られる城下図においても村上家であり、安政図では水島家に変わっている。村上家は、もとは因州の住人で、池田備中守に仕えたが、のち主家断絶により浪人していたところ、二代藩主忠頼に江戸において300石馬廻りで召し抱えられた。嘉永のころの当主村上守太郎は江戸で御側物頭を勤め没しているため、屋敷地が水島家になったのだろうか。『御家中略系譜』には守太郎の後の記載がないため不明である。

村上家の屋敷地は、北側を入口としており、調査区の位置は、屋敷地の東側境界線をまたいで中央やや北寄りの位置にある。表土は地表から5cmほどしかなく、かなり削平を受けていると見られる。屋敷の東境の遺構は検出されておらず、削平によるものと考えられる。屋敷境と無関係な軸をとるSD1は、出土遺物から15~16世紀の所産と考えられ、侍屋敷建設以前の中世村落に伴う遺構と考えられる。また、近世の井戸や土坑は、深い遺構であるので残存していたと考えられる。屋敷地の中央東端にあたり、北側から順に庭、建物などがあるとすればその裏手を調査したものと考えられる。



第11図 出土遺物写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうぐまさむらいやしきいせき だい27じはつかつちょうさほうこく		
書名	京限侍屋敷遺跡 第27次発掘調査報告		
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第343集		
編著者名	江頭 俊介		
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課		
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL0942-30-9225 FAX0942-30-9715 Email:bunkazai@kurume.fukuoka.jp		
発行年月日	2014（平成26）年3月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
きょうぐまさむらいやしきいせき 京限侍屋敷遺跡 第27次調査	くろめしきやうまち 久留米市京町 232-1、232-2、 232-3	40203		33° 19′ 7″	130° 30′ 2″	20130612 ～ 20130710	140㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
京限侍屋敷遺跡 第27次調査	集落	中世 近世	溝 井戸 土坑	1条 2基 1基	土師器、瓦質土器、 近世陶磁器		近世の京限侍屋敷村上家の敷地内を調査した。中世の溝や、近世の土坑を検出した。	
要 約								
近世の京限侍屋敷村上家の敷地内を調査したところ、中世の溝や、近世の土坑を検出したが、削平が著しく、屋敷境の遺構は検出されなかった。村上家の後の居住者は水島家である。								
土木工事の届出日		平成25年4月17日			遺物の発見通知日		平成25年7月17日 (25文財第479号)	

京限侍屋敷遺跡

— 第 27 次発掘調査報告 —

久留米市文化財調査報告書 第 343 集

平成 26 年 3 月 31 日

発 行 久 留 米 市 教 育 委 員 会

編 集 久留米市市民文化部文化財保護課

印 刷 服部印刷株式会社

久留米市梅満町 410-1

京隈侍屋敷遺跡

—第二十七次発掘調査報告—

久留米市文化財調査報告書

第三四三集

平成二十六年

久留米市教育委員会